

建築学生ワークショップ法隆寺2026

architectural workshop HORYUJI

参加学生募集！

応募締切

5.15
Call for entry

世界最大から世界最古の木造建築へ — 法隆寺

「法隆寺地域の仏教建造物」として、ユネスコの「世界遺産」に登録されている聖地に於いて

「創建 607 年」
2026 年 法隆寺 開催

法隆寺について

607 年斑鳩宮に隣接して創建された法隆寺は、金堂、五重塔を中心とする西院伽藍と、夢殿を中心とした東院伽藍に分けられ、境内の広さは約 18 万 7 千㎡とされています。西院伽藍は現存する世界最古の木造建築物群であり、太子ゆかりの古代寺院の姿を現在に伝える仏教施設です。そしてこの斑鳩の地は生駒山地の南端近くに位置し、大和川を通じて大和国（現・奈良県）と河内国（現・大阪府南部）とを結ぶ交通の要衝でありました。付近には藤ノ木古墳を始めとする多くの古墳や古墳時代の遺跡が存在し、この地が古くから一つの文化圏を形成していたことを伺え、近年では 1993 年に、法隆寺の建築物群は法起寺と共に、「法隆寺地域の仏教建造物」として、ユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録されています。

開催

本開催は、公募した参加学生たちを 5 月 15 日（金）に選定し、10 の班に分かれて、6 月 6 日（土）に全国から奈良に集まり、現地調査を開始します。境内では、開催テーマとしての位置づけにもあるこの場所が持つ特有の力や意味を身体で感じ、その中から各々の班で発想の原点を見出していきます。さらに周辺地域の街歩きを繰り返し、いま現代に生き、地方で学んでいることへの意味をみずから問うていきます。

7 月 18 日（土）の提案作品講評会では、国内外にて活躍をされる建築家の先生方を中心とした講評者の指導のもと、日本における貴重で特殊な環境における場所性に根づいた実作品をつくりあげる意味を問い正され、翌日、7 月 19 日（日）の実施制作の打合せでは、地元の建築士や施工者、大工や技師、職人の方々に伝統的な工法を伝えていただく機会を得ながら、日本を代表する組織設計事務所の方々や多くのゼネコンに所属される技術者の皆様による実技指導をいただきます。

9 月 13 日（日）、この参加学生たちが制作した小さな建築を 10 体、法隆寺境内に実現します。当日は、これらのプロセスを経て創出した建築空間を 1 日だけ、どなたでも体験していただけます。そして、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や美術家の方々、世界の建築構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評者にお集まりいただき、公開プレゼンテーションを開催いたします。

学び

開催には、県内をはじめとした奈良周辺の多くの方たちや、これまでの開催地の関係者の皆さま、そして全国から集まる建築に関わる関係者や一般参加者に向けた発表を行います。建築のプロセスに胸を躍らせる 3 ヶ月。参加学生たちがさまざまな歴史をもつ古代寺院の伝統構法を学び、この文化に位置づけた解釈を生み、法隆寺に存在し続ける建築様式に連なり、訪れた人たちの心を落ち着かせ、祈りを捧げるような空間体験と提案の発表に、どうぞご期待ください。



西院伽藍全景



金堂（飛鳥時代）



回廊（飛鳥時代）



夢殿（奈良時代）



聖霊院（鎌倉時代）



絵殿・舍利殿（鎌倉時代）



大講堂（平安時代）

Architectural Workshop HORYUJI 2026

開催場所 法隆寺境内（奈良県）

法隆寺は 607 年、聖徳太子自らが住む斑鳩宮（いかるがのみや・現在の奈良県生駒郡斑鳩町）に隣接して創建された、太子ゆかりの古代寺院の姿を現在に伝える仏教施設で境内の広さは約 18 万 7 千㎡とされ、西院伽藍は現存する世界最古の木造建築物です。



現地滞在スケジュール

6 月 06 日(土)
現地説明会・調査（日帰り）

7 月 18 日(土)
提案作品講評会（1 泊 2 日）

19 日(日)
実施制作打ち合わせ（1 泊 2 日）

9 月 08 日(火) - 9 月 14 日(月)
合宿にて原寸制作（6 泊 7 日）

9 月 13 日(日)
公開プレゼンテーション

※ 参加申込の際に、全日程の予定を確認してからお申込みください。

6 月 27 日(土) 午後
各班エスキース(東京・大阪会場)

開催期間 2026 年 9 月 8 日（火） - 9 月 14 日（月） 6 泊 7 日

※ 合宿にて原寸制作

※ 9 月 13 日（日）大講堂・聖徳会館にて公開プレゼンテーション

参加費用 実費（宿泊費、保険代、資料費等 ¥50,000 <改訂しました> 事前徴収制）

※ 現地までの交通費・食費は各自別途負担となります。

※ 開催地の有志の方々のご協力と、学生の参加費により運営をしています。

参加申込

ウェブサイトからお申込みください

<https://ws.aaf.ac>

※ 参加者募集期間 2025 年 9 月 8 日（月）～ 2026 年 5 月 15 日（金） 23:59（必着）

※ 参加対象者 建築および都市、環境、デザイン、芸術など、これに類する分野を学ぶ学生および院生【参加学生】定員：60 名程度（大学院生 10 名 + 学部生 45 名 + 運営サポーター 5 名）10 グループを予定

ただし、定員を超えた場合は、主催者による選考をおこないます。予めご了承ください。

【運営サポーター】定員：5 名程度（参加・宿泊費無料 開催期間中）

開催期間中、合宿期間中の運営サポーターも募集いたします。（学部は問いません）

※ 交通費・食費

各自・自己負担

参加予定講師

日本の文化を世界へ率いる方々を中心として、建築・美術両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家や都市計画家、コミュニティデザイナー、構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評。また近畿二府四県の大学で教鞭を執られ、日本を代表されるプロフェッサー・アーキテクトの皆さまにご参加いただけます。

石川 勝（プランナー | 万博会場運営プロデューサー） 倉方 俊輔（建築史家 | 大阪公立大学教授）

長田 直之（建築家 | 奈良女子大学教授）

太田 伸之（マーチャンダイジングコンサルタント | 松屋顧問） 稲山 正弘（構造家 | 東京大学名誉教授）

永山 祐子（建築家 | 永山祐子建築設計主宰）

建島 哲（美術評論家 | 草間彌生美術館長、京都芸術センター館長） 腰原 幹雄（構造家 | 東京大学教授）

平田 晃久（建築家 | 京都大学教授）

南條 史生（キュレーター | 美術館顧問） 櫻井 正幸（旭ビルウォール取締役会長）

平沼 孝啓（建築家 | 平沼孝啓建築研究所主宰）

中島さち子（音楽家数学研究者 STEAM 教育家） 佐藤 淳（構造家 | 東京大学准教授）

藤本 壮介（建築家 | 藤本壮介建築設計事務所主宰）

堀木エリ子（和紙デザイナー | 京都美術工芸大学 客員教授） 陶器 浩一（構造家 | 滋賀県立大学教授）

安原 幹（建築家 | 東京大学准教授）

福島 良典（ジャーナリスト | 毎日新聞社主筆） 青木 謙治（研究者 | 東京大学教授）

山崎 亮（コミュニティデザイナー | 関西学院大学教授）

五十嵐太郎（建築史家・建築批評家 | 東北大学教授） 芦澤 竜一（建築家 | 滋賀県立大学教授）

吉村 靖孝（建築家 | 早稲田大学教授）

建築学生ワークショップとは

建築ワークショップは、建築や環境デザイン等の分野を専攻する大学生を対象にした、普通の大学生活では体験できないスケールで作品制作を行う地域滞在型のワークショップです。国内外にて活躍中の建築家を中心とした講師陣の指導のもと、開催地の歴史や地域環境を研究しながら、他大学生との交流の中でその場所における社会的な実作品をつくりあげる経験を目的としています。

“今、建築の、原初の、聖地から” 伝えたいことを、空間として表現してください。

国内でもまれにみる、「木の文化・紙の文化」の伝承の宝庫で、古来の伝統的建築様式を今に伝える法隆寺の建築物群は法起寺と共に、1993 年（平成 5 年）「法隆寺地域の仏教建造物」として、ユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録されています。建築の道を歩み始めた次の日本建築を担う学生にとっては最も大切な実学として学び、保存修復や造営を繰り返すこれらの建築から、揺るぎない知己の基軸が築かれていくことでしょう。

【スケジュール】

5 月 07 日(木) 参加説明会開催（東京大学） 稲山正弘

5 月 14 日(木) 参加説明会開催（京都大学） 腰原幹雄

5 月 15 日(金) 23:59 必着 参加者募集締切

6 月 06 日(土) 現地説明会・調査

6 月 27 日(土) 各班エスキース(東京会場・大阪会場)

7 月 18 日(土)～19 日(日) 提案作品講評会と実施制作打ち合わせ

18 日(土) 提案作品講評会

19 日(日) 実施制作打ち合わせ

7 月 20 日(月)～9 月 07 日(月) 各班・提案作品の制作

9 月 08 日(火)～9 月 14 日(月) 合宿にて原寸制作ファイナル

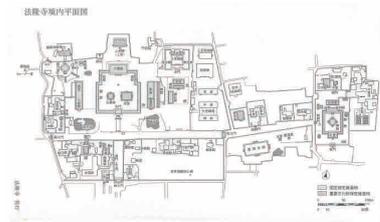
08 日(火) 現地集合・資材搬入・制作段取り

13 日(日) 公開プレゼンテーション

14 日(月) 撤去・清掃・解散



法隆寺境内全景



境内平面図

【制作内容】

“今、建築の、原初の、聖地から” ～未来に受け継ぐために建築ができること

“唯一無二の環境を守るために、あなたの提案を実現化してください”

- ・フォリー（原寸模型）を地域産材（自然素材：木材、和紙、土、石など）の材料で制作
- ・リユース、リサイクル制作を前提とし、ゴミを出さない手法や構法、利用方法を探る

開催記念 説明会
講演会

全国の建築学生が合宿にて制作を行う「建築学生ワークショップ」は 2026 年、9/8 (火) - 9/14 (月) に法隆寺境内にて開催します。このワークショップの参加募集の説明会と開催を記念して、活躍される構造家に自身の学生時代の体験を通して、現在の研究や取り組みにどう影響しているのかをレクチャーしていただきます。ワークショップへの参加を予定していない方でも、どうぞお気軽にご参加ください。

東京会場

東京大学 (弥生キャンパス)

農学部 弥生講堂アネックス

東京メトロ南北線「東大前駅」徒歩 3 分

東京メトロ丸の内線・大江戸線「本郷三丁目駅」徒歩 10 分

5月7日|木|17:30 - 19:00 (17:00 開場)

入場無料 | 定員：先着 100 名 | 要申込 ※ 当日のご参加も若干名様まで可能です。
※ 開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 稲山正弘 (構造家)

1958 年愛知県生まれ。82 年東京大学工学部建築学科卒業。ミサワホームを経て同大学院博士課程修了、博士(工学)。90 年稲山建築設計事務所(現・ホルツストラ)設立。東京大学大学院教授を経て 2024 年より名誉教授。主な構造設計に、いわむらかずお絵本の丘美術館、岐阜県立森林文化アカデミー、東京大学弥生講堂アネックスなど。日本建築学会賞(技術)、松井源吾賞など多数の賞を受賞している。主な著書に、「木造軸組工法住宅の許容応力度設計(2008 年版)」(共著)、「中大規模木造建築物の構造設計の手引き」(彰国社)など。



京都会場

京都大学 (吉田キャンパス)

百周年時計台記念館 国際交流ホールIII

京阪本線「出町柳駅」徒歩 10 分

京都市営バス「京大正門前」または「百万遍」下車 徒歩 10 分

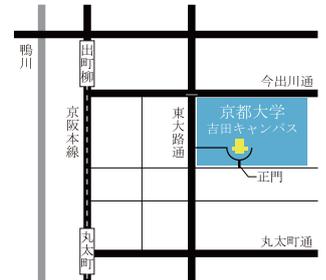
5月14日|木|18:30 - 20:00 (18:00 開場)

入場無料 | 定員：先着 100 名 | 要申込 ※ 当日のご参加も若干名様まで可能です。
※ 開催日程・場所は予告なく変更する可能性があります。
ウェブサイトを再度ご確認ください。



基調講演 腰原幹雄 (構造家)

1968 年千葉県生まれ。2001 年東京大学大学院博士課程修了。博士(工学)。構造設計集団<SDG>を経て、12 年より東京大学生産技術研究所・教授。NPO 法人 team Timberize 理事。構造的視点から自然素材の可能性を追求している。受賞：松井源吾特別賞、土木学会デザイン賞最優秀賞、日本建築学会賞(業績)、都市住宅学会業績賞など。主な著書に「都市木造のヴィジョンと技術」(オーム社)、「感覚と電卓でつくる現代木造住宅ガイド」(彰国社)など。



座談会 | “今、建築の、原初の、聖地から” 未来に受け継ぐために建築ができること 建築学生ワークショップ法隆寺2026

古谷正覚(法隆寺管長) × 大野正法(法隆寺執事長)

× 腰原幹雄(構造家 | 東京大学生産技術研究所 教授) × 櫻井正幸(エンジニア | 旭ビルウォール 代表取締役 社長)

× 佐藤淳(構造家 | 東京大学 准教授) × 平沼孝啓(建築家 | 平沼孝啓建築研究所 主宰)



座談会の様子 (法隆寺 寺務所 大広間にて)

———全国の大学生が参加するこの建築学生ワークショップは、毎年、場所を移しながら開催してきました。歴史と場所の特性をはっきりと持つ開催地と、周辺的生活文化を合わせて調査することにより、観光として訪れるだけでは知ることのできない、街や地域との関わりや、建築を保全していく造り方の技にも触れ、制作を含めた実学としての地域滞在を叶えます。神聖な場所の静粛な空間からコンテキストを見出し、現場で建築の解き方を探るきっかけを経験していきます。この法隆寺は607年、聖徳太子自らが住まれた斑鳩宮に隣接したこの地に創建された、太子ゆかりの古代寺院です。金堂、五重塔を中心とする西院伽藍と、夢殿を中心とする東院伽藍に分けられ、境内の広さは約18万7千㎡。西院伽藍は現存する世界最古の木造建築物群で1993年に「法隆寺地域の仏教建造物」として、ユネスコの「世界遺産」に登録され、新たな歴史を刻み当時と同じ姿を現代に伝えています。近現代における主要都市のまちづくりに欠かせない最も貴重となる「聖地」という清らかな場に身を置き、全国から集まる建築学生らが伝統的な構法に触れ、この場に位置づけた建築の解釈を生み出します。このワークショップでは場所の特性を用いるため、大きく分けて「歴史」「場所性(地形)」「現代の問題」の観点を提案に求めます。法隆寺で受け継がれてきた、空間性へのテーマや実現へのコンセプトのヒントとなる話題を、どうか併せてお聞かせください。

本日は開催地として多大なご尽力をくださいます法隆寺にて、全国の参加学生に向けてお導きをくださる、古谷管長をはじめ、大野執事長にもご参加をいただき、この建築ワークショップを初年度から見守り続けてくださる、東京大学の腰原先生、佐藤先生、そして毎年、私たちと併走したサポートをくださいます旭ビルウォールの櫻井社長、オーガナイザーの役割を担い続けてくださいます、建築家の平沼先生と共に、法隆寺開催についてお聞きしたいと思います。皆さま本日はどうぞよろしくお願いいたします。

平沼：まず創建の経緯をお聞かせいただけますか。

古谷：聖徳太子のお父様、用明天皇がご病気になるため、ご自身の病気の回復を祈るため寺の建立と薬師像を作ることを発願されましたが、崩御され実現されませんでした。そこでその意思を継いで、推古天皇と聖徳太子が若草伽藍の法隆寺を建立されました。薬師如来の光背銘の年号によりまして、607年ということになっております。立地条件としては、飛鳥を見渡せたことです。その頃は海運でしたので、大和川を遡ってきて飛鳥へ行きますから、ちょうど亀の瀬峠を通るここが一番良い土地です。地名にも、古い名前があり、王寺町には舟渡という地名が残っていたり、河合町には長倉、穴闇という漢字が使われており、おそらく、川沿いに倉があったのだと思うのですが、要するに荷物を降ろしたり、保存したりという、場所的、権力的に抑えるちょうど良い場所だったのではないかと考えています。

平沼：仏教は百済から伝承されてきた当初、どのように伝わったのでしょうか？

古谷：百済の聖明王が538年に、日本へ経典と仏像を伝えたのが一番最初の仏教伝来とされています。その経典を聖徳太子が読まれて勉強されたということで、法隆寺と聖徳太子が繋がってくるのですが、それまでに物部氏と蘇我氏による、排仏と崇仏の戦いがありました。聖徳太子は蘇我氏と共に崇仏の側で戦われました。蘇我氏が平野の丘に仏塔を建てたのですが、物部氏がそれを潰して、仏像を難波の堀江に捨てたために戦いが激しくなったと言われています。難波の堀江に捨てられた仏像は現在、善光寺の如来として祀られています。

佐藤：この場所が選ばれた時のお話ですが、このあたりは平野になっていますよね。これは元々そうなのか、あるいは切り開かれた土地なのでしょう？

古谷：切り開かれた土地ではなく、大和平野は沼地だったらいいのです。そこに土などが堆積して、このような盆地になったと。両方に山があって中央に川がで、物流にも川があるので最適だったのでは。

大野：奈良盆地自体が湿地帯でその水が抜けていきますが、一番深いのが大和川です。周りの川、例えば飛鳥川や佐保川からも大和川へ注がれ大阪湾に繋がっています。それを遡って飛鳥の都へ、その大陸から伝来した新しい文化を運んだということになります。

佐藤：本当に上手く山に囲まれていますね。その頃にはもうすでにかなりの人が暮らしていたのですか？

古谷：いえ、なかなか生活できていたわけではないようです。山の辺の道なども沼地の湿地帯を避けて中腹にできた道だと聞いています。

腰原：山側も法隆寺の繋がりとしてありますよね。山があつての法隆寺なのか、やはり法隆寺は法隆寺として存在しているのでしょうか？今でも山や森との付き合い方として何か残っているものはあるのですか？

古谷：北側に山という高いものがあって、南に開けているという土地がよい。そして横に川が、富雄川が通っているというのが四神相応の地としてよいという考え方があるようです。基本的に裏山へ木を植樹して修理の際に使えるような材をつくろうと一時期していましたが、場所的に良い木が育ちませんでした。

大野：また中世頃は修験もここでありまして、裏山を道場にしていました。蔵王堂があったことを示す痕跡も残っています。昭和大修理の頃、木を植えられたようですが、当時は今みたいにあまり木は茂ってなかったのではないかと思います。

佐藤：参加学生は、周りにある自然との関係からつくるものの形を決めたり、自然素材などを使うことも多いのです。もともと沼地だったということですが、普段の暮らしの中で、水はけが悪いとかそういうことはないのですか？

古谷：結構水はけが悪いですし、川も本流よりも支流へ溢れてしまうということがあります。堰をつくっていますが、堰で水を留めると上から流れて来た水が本流へ入らなくて堰で溢れてしまうようなこともあるようです。

腰原：以前、版築塀の研究でご協力していただき、ここで使われていた土の分析をさせていただいたのですが、やはり粘性土が多くて水はけは良くありません。しかし、砂が多いと突き固めてもあまり固まらないのですが、粘土と砂分布の比率がちょうど良く、固めると一番硬く固まるような粒度分布になっていたのです。分析をされて版築塀の修理もされていると思うのですが、土との関係はいかがでしょうか？

古谷：私が小さい頃は、この辺に瓦をつくっておられる方が結構おられたんです。並松にも瓦屋さんがあったし、夢殿の近くにも瓦屋さんがありました。南の大和川に近い神南の方にも瓦屋さんがあって、田んぼを掘れば粘土質の土が結構出てくる。その土で作った瓦を焼いていたようです。今は一般の家庭でも瓦の需要がなくなり、瓦屋さんも



古谷正覚
(法隆寺管長)

平沼孝啓
(建築家 | 平沼孝啓建築研究所主宰)

段々減ってきています。私が小さい頃は夢殿の近くの瓦屋で粘土ちようだいと言ったら粘土がたくさん貰えて、それで遊んでいました。

一同：笑

佐藤：ここは建立された当時、木造も含めた建立の技術は中国から学ばれたのですよね？具体的にこの寺院の様式に似ているとか、つくり方が似ているというものは見つかってないのですか？

古谷：中国、朝鮮半島から渡来していますが、朝鮮半島の寺院が結構潰れており、残ってるのは石の塔などで、建物自体は逆に日本の建物の設計図を見て、向こうで復元しようという例もあるようです。

櫻井：しかし湿地にこれだけ大きな建物をこれだけ長い期間使えるように建てるということは、よほど基礎がしっかりしていないと、もたないと思うのですが。

大野：この法隆寺自体は、山の中腹や裾野にあたりますので、湿地ではないのです。よく七不思議で、水害に遭っても法隆寺には水が来ないと言います。南大門より南は下がっていますので。

古谷：海拔 50～53m ありまして、大和川が氾濫しても、ここまでは水が来ないということです。

櫻井：ものを運ぶにも便利で、うまく基礎も強いところを利用して、建立されたということなんですね。

大野：地山を削って沢になっている部分等を埋めています。そこに瓦が捨てられていて、発掘すると出てきています。その延長線上に、今の弁天池とか鏡池とかがあり、そこをうまく西院伽藍の東西になるように避けているように思います。

腰原：法隆寺の場合、法隆寺様式なのか飛鳥様式なのか分からないのですが、その後この法隆寺の延長線上にあるような建物というのでも出てきておらず、独特の建物として残っているイメージがあるのですが、派生のような、似た建物ができたという話もあり聞かないですね。柱にしても、大陸から来たと言う説が否定され始めて、やはり独自のものではないかと言われています。あの組物にしてもバラバラに組み合わせていくものがある程度一体化された組物になっているので、特異なものなのか、元々そうだったものから派生したのかというのが想像できないのです。

古谷：しかし、祀崩しの高欄と、人字型の割束というのは中国の大同石窟に描かれてあるものが元になって、そういう飾りを金堂とか塔とか中門に付けたという説明をしているんです。

腰原：実はあまり大陸の影響を受けているわけではなくて、大陸の勉強をしてきたこの地の人たちが、自分たちの価値観でつくったのではないかと見ても良いのかなという気もするのですが。

古谷：良いとこ取りというような感じでね、装飾としては本当に良いものだと。

大野：雲形の肘木がありますが、あれは中国にはなかったみたいですね。

腰原：そうなんです。あれは、逆なんですよ。元はバラバラだった組物が一体化されているんですよ。教えとしては、過去を守ることと先進的なものを取り入れようということと、どちらが強いのですか。

大野：奈良時代に修理されると、技術的には奈良時代の技術がそこに表れて、平安には平安の技術、鎌倉になるとまた鎌倉の建物になっていくと。修理されるたびに、その時代の技術でつくられているわけです。ただ昭和大修理の時に、その付加された部分を当初に戻したりしています。宗教行事には時代ごとに付加されていったものがありまして、使いやすくなっていたものまで取り除いて当初へ戻すということになったものですから、法要などに支障が出たりしました。

古谷：例えば昔は金堂と回廊が屋根で繋がっていたので雨が降っても法要ができていたのですが、それを昭和の修理の時に外したため、できなく使いづらくなりました。他にも扉を堂内での法要を行いやすくするため外開きにしていただけ、修理の時に元に戻して、法要がしにくくなったということもあります。

腰原：建物はできた当時のまま、ずっと使えるわけではない。長く使うためには手を加えて時代の価値観に合わせるいかないと、残らないと思うんです。やりすぎはダメなのでしょうが、やはり最初にあったものだけでなく、それを積み上げて修理をしたり加えていったりすることによって役に立つように、現代でも使えるものになるのだと思います。これから新しく建物をつくった時も、つくって終わりではなく、つくった後に使いやすくし続けるということが大事だということ、参加学生に伝えたいと思っています。

佐藤：創建当時の道具類は残っていないのですか？工具とか。



大野正法
(法隆寺執事長)

櫻井正幸
(旭ビルウォール 代表取締役社長)



腰原幹雄
(構造家 | 東京大学生産技術研究所教授)

佐藤淳
(構造家 | 東京大学准教授)

古谷：道具は残ってませんね。釘などは、出てきますけれども、カンナとか槍鉋などは残ってはいないです。金属は古い瓦釘を鑄つぶして槍鉋をつくったとかいうような話はされていますが。

平沼：講堂の再建は 990 年に一度されていますよね。それ以降、落雷とか太平洋戦争で焼けたことはないんですか？

大野：鎌倉時代に 2 回ほど落雷で一部が焼けたという記録はありますね。とくに建長 4 年 (1252) の時には火が心柱にまでおよび、少し焦げ目が残っていると聞いています。

佐藤：法隆寺では全ての木材の形は分かっているということですが、その削り具合も再現しているのですか？当時鉋はなかったけれども、昭和大修理では鉋が使われたとか・・・。

古谷：扉の板をつくるのも鉋で綺麗にした後、槍鉋でそれらしく仕上げたという風に聞いております。

腰原：寸法や技術がまだ伝承されていないので、昔の工具を復元して使っても昔と同じようにはできないというところはありますよね。

佐藤：法隆寺は今、分離している神社も元々は 1 つだったんですね。

古谷：夢殿から西大門まで、甲子園球場 4 つほどの敷地があります。西院伽藍と東院伽藍 2 つの伽藍を含めて法隆寺ということに今はなってますけれども、昔から大きかったわけではありません。

大野：現在西大門から東院伽藍の東の壁まで、直線で約 600m あります。平安時代の末に南大門が今の位置へ移されて、その間には塔頭というお坊さんの住まいが点在していました。南大門南側は田んぼなどの農地で、そのさらに南に龍田道という街道があって、そこから法隆寺への道の東と西に松の木が鎌倉時代に植えられました。それが今の参道 (松並木) です。

佐藤：法要の時に何か使われるものはありますか。

古谷：毎年 3 月の 22 日から 24 日まで、聖霊会という聖徳太子の御命日法要を行っていますがその際、食べ物をいろんな形で飾り付けて、終わりましたら皆さんにそれをお供物として、お配りします。

大野：これは大山立という高さ約 3m のものですが、餅とか団子を

使っていわゆる仏教世界をイメージしたものをつくってお祀りします。お供物を一個ずつ、鳳凰とか燕とか、水仙とか梅の花とか、いろいろなものをつくります。それが一つの聖霊院での大きな行事です。我々はやはり聖徳太子がお建てになったお寺をずっと守って、その意思を伝えていくというのが基本ですので、聖徳太子の遺徳を称えるというのがそこにあるわけです。

櫻井：一度建物をばらしてみたら、外のものだけが痛んでいて、基本的に中のものは再利用したというのを改修の資料で見たのですが、外と内は分けて改修するのですか？千三百年以上過去の自然災害に耐えている建物を改修する時に、朽ちた部分だけを変えているのか、それとも最新の耐震設計で、最近の建築技術を使うような行政の要求があったり、補強が入るのですか？

大野：例えば柱は下の方から朽ちていきますので、その部分を切って、継ぎ足して修理をします。ですから上は元のままで、下だけを新しい木に変えるような修理になりますね。五重塔がもし地震で倒れても、現在どういう材でどういう大きさのものが使われているのか全てわかっていますので、建物は再建することができます。ただし、中の塑像が崩れると、新たなものをつくることになると思います。

古谷：建物自体は、火事で無くなってしましますが、地震でしたら残りますので、それを使って、もう一度再建するという思いですね。

腰原：法隆寺では軒の下りという問題があって、庇が下がってくるのでつかえ棒のようなものを使ってきた。今も残しているものもあれば、昭和の大修理で、内部で補強をして撤去したものもあります。不具合もあるにはあるけれど、それを元の形で補修するのか、新しく増やして補強するのか、時代ごとに議論があります。地震対策についてはすべきことがあると思いますが、そういう議論は最近ないのです。僕は各時代ごとに一生懸命最善の努力をすればいいと思います。

平沼：このワークショップでは地元の高校生を、奈良県の教育長と連携してお誘います。高校生にとっては講評者の方たちよりも、少し上級生である全国の大学生、参加学生の方が身近に思うようです。彼らがこの地で取り組んでいることを見た地元の高校生たちが卒業して他府県の大学に行ったとしても、またこの斑鳩の町、あるいは奈良に戻ってきて造営に携わりたいとか、技術者を目指して進路を考えるきっかけになればいいと考えています。



西院伽藍にて

古谷：我々自身が、現在伝わっているものを次の世代へどうやって伝えていくかということで一番悩んでいるわけでございますし、技術の面でもだんだん廃れてくることが、後継者がおられないという問題もいろいろ出てきています。やはり本物を見ていただいて、何か感じていただくこと。次の後継者というものが、このワークショップで何か感じた人の中から出てくれば良いなと思っています。

平沼：僕たちも同じような思いで、次の世代にバトンを繋いでいきたい。学生たちの炎を沸かせてあげたいのです（笑）。

古谷：我々の年代でしたらとにかく「頑張れー！」（笑）と、叱咤激励ぐらいしかできないのですが、我々としても次の世代へ引き継いでいただける、そういうものを逆に皆さんに何か感じ取っていただけることを期待しています。

腰原：我々としては当たり前だから言うほどのことではなく、特別なことではないと思っていることが、若い世代は、どうしてなのか分からないんですね。ですから別に言葉にしなくても、その当たり前を見た時に不思議に思って、何なんだろうって気付いてくれれば自分で考えるのでしょう。気付けない人は所詮無理なのではないかなと、冷たく言います（笑）。ですから皆さんが普段当たり前になさっていることを見た勘の良い学生が、自分と価値観違うんだ、昔の人たちはこうやってやってたんだとか、あるいはその人たちが次にやろうとしていることを一緒にやってみようかなと思ってくれれば良いと思っています。今の学生とは研究の仕方や学び方が全然違うので、僕らの頃のやり方を伝えて成功するわけではないのかもしれませんが、違う価値観があることを知ると、もう一工夫できると思っています。

大野：先程のお供物づくりでも、我々はいつもやっていますので面倒だなと思うこともあるのですが、他から来られた方は、それを体験したいとおっしゃることがあります。日常ここにいると気付かないことが結構ありまして、他から来られた方に素晴らしさを教えてもらったりすることが結構あります。やはり今の腰原先生がおっしゃったように、言葉で言うより見てもらうのが一番良いと思います。

佐藤：素朴に話していただくことで、気が付くことがすごく多いと思うので、是非聞かせていただければと思います。

古谷：私がよく話をするのは「観光」という言葉なんです。その場が放っている光を観ていただくこと。受け取る人が何を感じるかによって変わってくるわけですが、物見遊山ではなく、本当の意味で「観光」で来ていただきたいなと思っています。何かを感じて帰っていただきたい、ということを今の人に求めたいと思います。

平沼：良いお言葉をいただきました。ありがとうございます。

（令和4年3月28日 法隆寺 寺務所 大広間にて）

——— 大変貴重なお話をいただき、本日はどうもありがとうございました。将来、この場所で開催した意義に継いでいくような、提案作品を募りたいと思います。

聞き手：杉田美咲（AAF | 建築学生ワークショップ2026 運営責任者）